

ブルガリア・ソフィア大学日本学科及び夜間公開講座 1998/99 年度 機関報告

出野 晃子

1. 概要

ソフィア大学では、1968年に日本語夜間公開講座として日本語教育が開始された。以後、国際交流基金専門家やブルガリア人日本語教師によって講座は存続し、1994年からは青年海外協力隊(JOCV)が派遣されるようになった。現在に至るまで、現地側スタッフと日本人スタッフの協力のもとに講座の運営が成り立っている。夜間講座の授業時間数は4学年とも週3回、1回2時間(午後5時から7時まで)であり、前期・後期ともに約15週間である。

また、1990年に日本語学科が設立し、大学主専攻における日本語教育が行われ始めた。その後1996年に日本語学科を日本学科に改称し、これまで隔年募集だった新生の受け入れが毎年募集になり、5年制が4年制となった。よって来年度の卒業生からは4年で終了し、その後約2年間の大学院前期課程(修士課程)が設けられることになる。学科の卒業生は皆、希望すれば試験無しで入学できる。ソフィア大学の日本人日本語教師は国際交流基金専門家1名、青年海外協力隊員(JOCV)1名(7月より2名)である。また、日本語図書室にはJOCVから図書館司書が1名派遣される。

2. 教師

日本学科: 日本人2名(国際交流基金専門家1名、青年海外協力隊1名:7月より2名)
ブルガリア人教師約6名(授業内容:日本語/日本文学/日本事情/経済/歴史/言語学)

夜間講座: 日本人1名(青年海外協力隊1名:10月より2名)
ブルガリア人教師4名(ボランティアまたは教育実習生)*来年度より非常勤講師採用の可能性

3. 学生

日本学科:1年生-10名、2年生-15名、3年生-7名、4年生-6名、5年生-11名
夜間講座:1年生-12名、2年生-10名、3年生-8名、上級生-10名

4. 教材

日本学科: 1年生-「日本語初歩」(国際交流基金)
2年生-「日本語中級Ⅰ」(国際交流基金)、「日本語会話・初級から中級へ」(凡人社)
「ロールプレイで学ぶ会話(Ⅰ)」(凡人社)、作文指導
3年生-「日本語中級Ⅱ」(国際交流基金)、読解(小説など)
4年生-「日本語作文Ⅱ」(専門教育出版)、読解(新聞・小説など)、各種文法問題など
5年生-生教材、論文指導

夜間講座: 1年生-「日本語初歩」(国際交流基金)(24課くらいまで)
2年生-「日本語初歩」(国際交流基金)(最後まで)、
3年生-「日本語中級Ⅰ」(国際交流基金)、「楽しく読もう(Ⅱ)」(文化外国語専門学校)
「楽しく聞こう(Ⅱ)」(文化外国語専門学校)、「毎日のききとり50日(下)」(凡人社)
上級生-「日本語会話中級Ⅱ」(TIJ 東京日本語研修所)
「楽しく聞こう(Ⅱ)」(文化外国語専門学校)、「毎日のききとり50日(下)」(凡人社)
新聞、小説など生教材

5. 年間日程

1998年10月1日(木)	日本学科入学式、日本学科及び夜間講座の前期授業開始
12月6日(日)	第1回ブルガリア日本語能力試験(1998年度より正式認定された)
12月下旬-1月初旬	クリスマス休業
1月上旬	書き初め教室
1999年1月下旬-2月中旬	日本学科・前期試験期間

2月22日(月)	日本学科・後期授業開始
3月13日(土)	文部省日本語日本文化研修留学試験(今年度候補者は12名)
3月29日(月)	国際交流基金成績優秀者試験 (この試験の最高得点者1名と日本語能力試験での優秀者1名が日本研修権を与えられる)
4月8日(木)-13日(火)	ヴェリクデン(イースター)休業
4月24日(土)	第5回日本語弁論大会 (最優秀者は5月中旬の福山市バラ祭への参加権を与えられる。昨年度より実施)
6月上旬	夜間講座・書道教室
6月11日(金)	日本学科・後期授業終了
6月25日(金)	夜間講座・後期授業修了
6月14日(月)-7月9日(金)	日本学科・学年末試験期間

6. 問題点

①教師間の連携がしにくい。

学期の初めにすべての科目の進度表を作るのだが、中にはマイペースにどんどん授業を進めていってしまう教師もいる。それで、速い進度についていけず振り落とされてしまった学生も多く、例えば夜間講座1年生は前期25人程度もいたのに後期終了時点で半分以下となった。もちろん学習項目は定着していないことが多い。教師間の引継ノートにも毎回よほどしつこくいわないと書いてくれない。

②レベルの差

夜間講座では、クラス分けテストをせず希望通りのクラスにしている為、特に日本語学習暦の長い学生の多い上級ではクラス内のレベル差が大きい。友人に会うのを楽しみに講座へ通っている学生も多いので、レベルに応じてクラス分けをするのは気が引ける。

③留学

他の東欧諸国と同様、日本留学のチャンスが少ない。私費留学できる経済力のある学生はほとんどいない。今の所日本語関係者の長期留学の可能性は、文部省の日本語日本文化研修留学試験(1年間の学部留学:昨年度実績3名)か、文部省研究生試験(2年間の研究生留学:昨年度実績1名)、創価大学との交換留学制度(2名ずつ)及び千葉大学への留学(隔年1名程度)しかない。英語圏の国の大学のように、多くの日本の大学との交換留学制度が確立できればいいのだが、他の東欧諸国同様、そのチャンスは少ない。

④講師問題

ブルガリアでは、ブルガリア人日本語教師が不足している。ブルガリアの経済状況はまだ不安定であり、物価が安い。教師に対しても十分な給料が出ないので、優秀な日本学科卒業生でも日本語関係以外の仕事をしたり、優秀な研究者の大半は海外へ活躍の場を求めに行ってしまうのが現状である。また、学校法上、夜間講座の教師を非常勤講師として認める事は難しいらしく、今期は無給で教えてもらっていた。大学側の古いシステムを改善し、責任感のある優秀な教師の育成のためにも十分な給料を出してほしい。また、日本学科4年生の教育実習の正式カリキュラムがないので、実習が単位になるようにカリキュラムを改正してほしい、と考えている。

⑤金銭問題

一般市民向けの夜間公開講座では、年々講座費が上がり受講生の負担が大きくなっている。また、講座費は大学側が集めるのだが、どのように本講座に利用されているのかがわからない。日本学科の設備にはほとんど還元されていないようである。そのため、再三にわたってこれらの一部を日本学科に還元し、さらに夜間講座の講師に給料として支払うように依頼してきたが、のれんに腕押しである。新学期が始まる前に大学側にかけてあつて少しずつでも改善していかなければならない問題である。